

地獄より（去年の秋）

著者	倉の人
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 5 8
ページ	1 7 2 - 1 7 3
発行年	1915-06-20
URL	http://hdl.handle.net/2298/6507

詩やら歌やら夢やらの 中に湧き出た藝術の

「巧」が彫つた大理石の人の形のやうにも見えました。

けれども熊野は物案じ 團子も食べず歌詠ます

何思うてか時々は 止まる額の花葩も

拂はぬのみか頸垂れて ホツと溜息つきました。

櫻が又も一しきり ハラ／＼と散る景色

宗盛公は櫻より 熊野の惱が氣にかゝる

「熊野よ、お前は何故に つまらぬ顔をしてゐるの

歌詠め、それも否ならば舞の一曲舞はしようか」

其時熊野はかぶり振り 潤んだ眼を上げまして

「否、何も要りませぬ 霞のやうな春の花

花の夕べに照る月の 影より濃い御恩寵

「都の花も惜しけれど」 十年、廿年住み慣れし

地獄より

(去年の秋)

「東の花が散りまする。」此の時熊野の痛ましい

眼には涙がこぼれます、眞珠のやうな露の玉。

三條三條早や過ぎて 四條五條の橋の上

市女笠や御所車 牛がモウ／＼鳴きまする。

躑躅、山吹、藤重ね 被衣かついだ女房等が

右や左を行きまする。 腰元葎がさした傘、

紅い、眞紅な繪の日傘。 頭を禿に切りました、

可愛い稚兒等の緋袴も 夕日のやうに繪のやうに

霞の奥に溶けまする。 加茂の河原や智恩院

六角堂や、清水寺、 名さへゆかしい京洛の

姿は霞に消えまする、 消ゆる都を後に見て

熊野は故郷に歸ります。 宗盛公の戀病

平家の盛、花のよな 散つ櫻のローマンス。

倉 の人

今更に秋のあはれを知る爲に山に來たりし我ならなくに。

うらぶれの心抱きて山深く阿蘇に來つれと靜心なし。

山宿の秋の夜風は凄かりき湯槽に一人物を想へる。

物すごき地獄の夜更一人寝に山家集をば讀みふけりにき。
我もいざ同じ思ひに叫ばなむ「寂しさなくば住み憂からまし」。
人あらずこのあたりに人は人あらず高く叫べど淋しさは湧く。
執着は夜峰かあらず湯かあらず別れともなきこの静寂かも。
夕暮を小高き丘に一人居て寒さにたへず歸る心も。
死にと行く人のことなど事もなう問はず語りに語る女等。
人死なば山荒れするが恐ろしとそれのみを言ふ女めでたし。
朝風に人なき山の木に倚ればはらほろろと落葉するかも。

ペリヘリオンの焰

一、二、兩 不

混

生

わがこゝろ木の芽のあまき香にむせびペリヘリオンの宮殿に入る。
むらさきの冷めたき色の小石ひとつきみが息吹に燃えそめにけり。
われをやく何の炎ぞ新らしきよみがりの日來るといひて。
哲人のふるきことの葉壁にかきまもり行く君驢馬に似るかも。
何ごとぞきみが命の絶ゆる日か赤まるの出し朝のかなしみ。
桃いろのうす絹きりて戀のうたかきてながめし春雨の宵。